

子どものこころの発達研究センター

1 構 成 員

	平成 28 年 3 月 31 日現在	
教授	2 人	
病院教授	0 人	
准教授	0 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	0 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	9 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	6 人	
大学院学生（うち他講座から）	0 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	0 人	
その他（技術補佐員等）	4 人	
合計	21 人	

2 教員の異動状況

森 則夫（教授 兼 浜松センター長）（平成 8 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月末日退職）

武井 教使（教授）（平成 19 年 4 月 1 日～現職）

辻井 正次（客員教授）（平成 18 年 4 月 1 日～現職）

松崎 秀夫（客員教授）（平成 24 年 11 月 1 日～現職）

玉井 日出夫（客員教授）（平成 25 年 10 月 1 日～現職）

土屋 賢治（特任准教授）（平成 19 年 4 月 1 日～現職）

高貝 就（特任准教授）（平成 25 年 4 月 1 日～

平成 28 年 4 月 1 日 児童青年期精神医学講座へ異動）

涌澤 圭介（特任准教授）（平成 25 年 7 月 1 日～平成 28 年 3 月末日退職）

山田 浩平（特任講師）（平成 25 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月末日退職）

伊藤 大幸（特任助教）（平成 23 年 4 月 1 日～現職）

村山 恭朗（特任助教）（平成 25 年 12 月 1 日～平成 28 年 3 月末日退職）

片桐 正敏（特任助教）（平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 9 月末日退職）

浜田 恵（特任助教）（平成 26 年 4 月 1 日～現職）

浅野 良輔（特任助教）（平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月末日退職）

上宮 愛（特任助教）（平成 26 年 10 月 1 日～平成 27 年 10 月 1 日から

特任研究員（非常勤）職位変更 平成 28 年 3 月末日退職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 27 年度
(1) 原著論文数 (うち邦文のもの)	15 編 (6 編)
そのインパクトファクターの合計	43.30
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	1 編
そのインパクトファクターの合計	0.00
(3) 総説数 (うち邦文のもの)	11 編 (11 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4) 著書数 (うち邦文のもの)	3 編 (3 編)
(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	2 編 (1 編)
そのインパクトファクターの合計	1.63

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Takagai S#, Tsuchiya KJ# (# contributed equally), Itoh H, Kanayama N, Mori N, Takei N, on behalf of HBC Study Team. : Cohort profile: Hamamatsu Birth Cohort for Mothers and Children (HBC Study). *International Journal of Epidemiology*, doi: 10.1093/ije/dyv290.
【小児発達学、疫学】 ,[9.176]
2. 土屋賢治・服巻智子・和久田学・新村千江・首藤勝行・大須賀優子・村田絵美・坂鏡子・中原竜治・浅野良輔・高貝就・鈴木勝昭・森則夫・黒木俊秀・片山泰一 : GazeFinder(Ka-o-TV)を用いた自閉スペクトラム症の早期診断指標の開発～1 歳 6 カ月健診における活用に向けて～. 脳 21. 18: 67-77, 2015. 【疫学、発達障害】 ,[-]
3. 片桐正敏・伊藤大幸・中島俊思・田中善大・野田航・浜田恵・村山恭朗・高柳伸哉・辻井正次 : 一般児童生徒の強迫傾向が後の抑うつ, 攻撃性を予測するかー単一市内コホート調査に基づく縦断的検討ー. 小児の精神と神経. 2015. 【発達心理学】 ,[-]
4. 村山恭朗・伊藤大幸・浜田 恵・中島俊思・野田航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次: いじめ加害・被害と内在化／外在化問題との関連性. 発達心理学研究, 26, 13-22. 2015. 【発達心理学】 ,[-]

インパクトファクターの小計

[9.176]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. Sato R, Tsuchiya KJ, Matsuzaki H, Takei N, Itoh H, Kanayama N, Suda T, Watanabe H, Ohashi T, Tanaka M, Nishimura S, Maekawa M, HBC Study group.: Fetal Environment and Glycosylation Status in Neonatal

Cord Blood: A Comprehensive Mass Spectrometry-based Glycosylation Analysis. *Medicine* (Baltimore) **95**(14):e3219, 2016. 【生化学】 [5.723]

インパクトファクターの小計 [5.723]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Fujioka T, Inohara K, Okamoto Y, Masuya Y, Ishitobi M, Saito DN, Jung M, Arai S, Matsumura Y, Fujisawa TX, Narita K, Suzuki K, Tsuchiya KJ, Mori N, Katayama T, Sato M, Munesue T, Okazawa H, Tomoda A, Wada Y, Kosaka H.: Gazefinder as a clinical supplementary tool for discriminating between autism spectrum disorder and typical development in male adolescents and adults. *Mol Autism* 7:19, 2016. doi: 10.1186/s13229-016-0083-y. 【精神医学】 [5.486]
2. Nishimura T, Takei N, Tsuchiya KJ, Asano R, Mori N.: Identification of neurodevelopmental trajectories in infancy and of risk factors affecting deviant development: a longitudinal birth cohort study. *International Journal of Epidemiology*, doi: 10.1093/ije/dyv363. 【小児発達学、疫学】 [9.176]
3. Toftegaard KL, Gustafsson LN, Uwakwe R, Andersen UA, Becker T, Bickel GG, Bork B, Cordes J, Frasch K, Jacobsen BA, Kilian R, Larsen JI, Lauber C, Mogensen B, Rössler W, Tsuchiya KJ, Munk-Jørgensen P.: Where are patients who have co-occurring mental and physical diseases located? *Int J Soc Psychiatry* 61(5):456-64, 2015. 【精神医学】 [1.333]
4. Yamauchi H*, Ogura M, Tanaka Y, Ito H, Honjo S.: The Effects of Maternal Rearing Attitudes and Depression on Compulsive-like Behavior in Children: The Mediating Role of Children's Emotional Traits. *Psychology*. In press. 【発達心理学】 [0.910]
5. Maekawa M, Iwayama Y, Ohnishi T, Toyoshima M, Shimamoto C, Hisano Y, Toyota T, Balan S, Matsuzaki H, Iwata Y, Takagai S, Yamada K, Ota M, Fukuchi S, Okada Y, Akamatsu W, Tsuji M, Kojima N, Owada Y, Okano H, Mori N, Yoshikawa T.: Investigation of the fatty acid transporter-encoding genes SLC27A3 and SLC27A4 in autism. *Sci Rep*. 2015 Nov 9;5:16239. 【児童精神医学、分子遺伝学】 [5.578]
6. Kurita D, Wakuda T, Takagai S, Takahashi Y, Iwata Y, Suzuki K, Mori N.: Deterioration of clinical features of a patient with autism spectrum disorder after anti-N-methyl-D-aspartate receptor encephalitis. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2015 Aug;69(8):507. 【精神医学】 [1.634]
7. Yamagishi S, Yamada K, Sawada M, Nakano S, Mori N, Sawamoto K, Sato K. Netrin-5 is highly expressed in neurogenic regions of the adult brain. *Front Cell Neurosci*. 2015 Apr 20;9:146. 【解剖学、神経科学】 [4.289]

8. 谷伊織・伊藤大幸・平島太郎・岩永竜一郎・萩原拓・行廣隆次・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・原幸一・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次：日本版短縮感覚プロフィールの標準化：標準値および信頼性・妥当性の検討. 精神医学, 57, 419-429. 2015. 【心理統計学】 ,[-]
9. 川本哲也・小塩真司・阿部晋吾・坪田祐基・平島太郎・伊藤大幸・谷 伊織：ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差—大規模横断調査による検討— 発達心理学研究, 26, 107-122. 2015. 【発達心理学】 ,[-]
10. 田中善大・伊藤大幸・村山恭朗・野田航・中島俊思・浜田恵・片桐正敏・高柳伸哉・辻井正次：保育所及び小中学校における ASD 傾向及び ADHD 傾向といじめ被害及び加害との関連. 発達心理学研究, 26, 332-343. 2015. 【発達心理学】 ,[-]

インパクトファクターの小計

[28.406]

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 高貝就: コホート研究からASDを理解する—HBC study の紹介—. 児童精神医学とその近接領域. 56(3); 339-346, 2015. 【疫学、発達障害、児童精神医学】 ,[-]

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 土屋賢治：自閉スペクトラム症の環境学的危険因子の研究—胎生期プログラミング研究への橋渡しの知見を概観する—. 最新医学70：47-55, 2015. 【児童精神医学】 ,[-]
2. 土屋賢治・高貝就：精神疾患における危険因子研究の役割—DOHaD 概念との関連から—. HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY. 22: 321-327, 2015. 【疫学】 ,[-]
3. 高貝就・武井教使：産科的合併症の評価尺度. 臨精医 44: 105-110, 2015. 【疫学】 ,[-]
4. 浜田恵・辻井正次：Vineland-II 適応行動尺度の紹介—子育て支援と心理臨床,[-]
5. 浜田恵：不器用な子どもをもつ保護者の養育行動と支援—縦断研究から見えてくるもの—チャイルドヘルス, 2015. 【発達心理学】 ,[-]
6. 浜田恵・辻井正次：JASPER(Joint Attention, Symbolic Play, Engagement, and Regulation)について. アスペ・ハート, 41.2015. 【発達心理学】 ,[-]
7. 浜田恵・村山恭朗・明翫光宜・辻井正次：発達障害者が社会適応を高めるには—ストレス科学,

30, 20-26.2015.【発達心理学】,-]

8. 浜田恵: 発達早期の親支援におけるアセスメント (特集: 発達支援のアセスメント) 臨床心理学, 16(2), 156-159.2016.【発達心理学】,-]

9. 奥村明美・高貝就: 乳幼児期の睡眠と発達. 子どものこころと脳の発達. 6: 16-22, 2015.【疫学】,-]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. 大隅香苗・高貝就・辻井正次: 自閉症スペクトラム障害における Vineland 適応行動尺度の有用性について. 子どものこころと脳の発達. 6: 5-15, 2015.【発達障害】,-]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・安永和央・谷伊織・平島太郎: 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(7)測定の信頼性と妥当性(1)アスペハート, 40, 102-113.【心理統計学】,-]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森則夫・杉山登志郎・和久田智靖 編著: 浜松医大流エビデンスに基づく精神療法実践集. ISBN978-4-7653-1635-4 第1版. 金芳堂. 2015.【疫学、精神医学】
2. 辻井正次 (監修)・萩原拓・岩永竜一郎・伊藤大幸・谷伊織 (著): AASP 青年・成人感覚プロフィール. 東京: 日本文化科学社 2015.【心理統計学】
3. 辻井正次 (監修)・萩原拓・岩永竜一郎・伊藤大幸・谷伊織 (著): ITSP 乳幼児感覚プロフィール. 東京: 日本文化科学社. 2015.【心理統計学】

(5) 症例報告

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. Kurita D, Wakuda T, Takagai S, Takahashi Y, Iwata Y, Suzuki K, Mori N: Deterioration of clinical features of a patient with autism spectrum disorder after anti-N-methyl-D-aspartate receptor encephalitis. Psychiatry Clin Neurosci. 2015 Jun 2. doi: 10.1111/pcn.12323. [Epub ahead of print]【発達障害】 [1.634]

インパクトファクターの小計 [1.634]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 平本厚美、井上雅彦、高貝就: レット症候群における合目的な手の使用の形成- 2症例の報告. 子どものこころと脳の発達. 6: 42-47, 2015.【発達障害】,-]

4 特許等の出願状況

	平成 27 年度
特許取得数（出願中含む）	1 件

名 称：不注意の測定装置、システム、および方法（PCT/JP2015/077803）

発明者： 森則夫、鈴木勝昭、土屋賢治、新村千江

出願日：2015 年 9 月 30 日

5 医学研究費取得状況

（万円未満四捨五入）

	平成 27 年度
（1）科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）	10 件 （1,110 万円）
（2）厚生労働科学研究費	1 件 （50 万円）
（3）日本医療研究開発機構(AMED)による研究助成	1 件 （65 万円）
（4）科学技術振興機構(JST) による研究助成	1 件 （0 万円）
（5）他政府機関による研究助成	0 件 （0 万円）
（6）財団助成金	2 件 （180 万円）
（7）受託研究または共同研究	1 件 （0 万円）
（8）奨学寄附金	0 件 （0 万円）

（1）科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）

武井教使：挑戦的萌芽（代表）いじめによる精神健康被害の大規模疫学調査及びいじめ予防プログラムの実施とその効果、平成26～27年度、70万円

武井教使：基盤 B（代表）乳幼児期早期の発達遅滞に関する、認知機能評価と脳 MRI による大規模追跡研究、平成 27～31 年度、260 万円

土屋賢治：基盤 C（代表）自閉症スペクトラムの state marker—注視点検出装置の臨床応用と展開、平成 25～27 年度、50 万円

高貝就：基盤研究C（代表）血清メタボローム解析による自閉症脂肪酸代謝異常の解明と診断マーカーの確立、平成25～27年度、80万円

涌澤圭介：若手研究B 前頭-頭頂葉機能インバランス仮説に基づく自閉性障害の脳機能解明と評価指標作成、平成25～平成28年度、70万円

山田浩平：若手研究B 恐怖不安関連因子stathmin1のTLR3を介したミクログリア活性化機構の解明、平成26～28年度、110万円

伊藤大幸：若手研究 B 自閉症者における認知—感情ネットワークの特異性に関する機能的脳画像研究、平成 27～29 年度、100 万円、

浅野良輔：若手研究 B 幼児期における自己制御機能の発達とその規定因に関する研究、平成 27～28 年度、150 万円

浜田 恵：若手研究 B 一般小中学生における性別違和感の実態とメンタルヘルス、平成 27～29 年度、100 万円

中原竜治：若手研究 B 生殖補助医療により生まれた児の運動・言語・社会性の発達の軌跡、平成 26～27 年度、120 万円

(2) 厚生労働科学研究費

高貝就：障害者対策総合研究事業（分担、主任：弘前大学神経精神医学講座 中村和彦）
発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成と普及、
平成26年～28年度）50万円

(3) 日本医療研究開発機構（AMED）による研究助成

土屋賢治：未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業～ICT を活用した診療支援技術研究開発プロジェクト（分担・機関代表）注視点検出技術を活用した発達障がい診断システムの開発、平成 27～30 年度、65 万円。

(4) 科学技術振興機構(JST) による研究助成

JST社会技術研究開発 研究啓発成果実装支援プログラム、発達障害の子どもへの早期支援のための『気づき』・診断補助手法の実装、H24～27年度、分担： 0万円, 研究代表者：大阪大学大学院、片山泰一

(6) 財団助成金

土屋賢治：先進医薬研究振興財団 一般研究助成（代表）、Ka-o-TV：幅広い年齢の自閉症スペクトラム児に対応した客観的診断指標の開発、平成 26～27 年度、100 万円
浅野良輔：公益財団法人マツダ財団 一般研究助成金（代表）、子どもの社会性を育むための社会化エージェント資源モデルの検討、平成 27 年度～29 年度）80 万円

(7) 受託研究または共同研究

独立行政法人科学技術振興機構 脳科学研究戦略推進プログラム（精神・神経疾患の克服を目指す脳科学研究（健康脳））＜課題F＞、自閉症の病態研究と新たな診療技法(診断・予防・治療)の開発, H24～27年度、分担： 0万円, 研究代表者：精神医学 森則夫

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	1 件
(2) シンポジウム発表数	1 件	5 件
(3) 学会座長回数	0 件	0 件
(4) 学会開催回数	0 件	0 件
(5) 学会役員等回数	1 件	0 件
(6) 一般演題発表数	4 件	

(1) 国際学会等開催・参加

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

1. Tsuchiya KJ: Neurodevelopmental Trajectories of Children with Autism Spectrum Disorder [Symposium]. Tohoku Forum of Creativity, Frontier of Brain Science, Symposium on Development and Disease. Sendai, August 24-26, 2015.

5) 一般発表

口頭発表

1. Takei N: Schizophrenia: no longer a mystery. Special Lecture (on behalf of Sir Robin M Murray). 5th World Congress of Asian Psychiatry, Fukuoka. 4-6 March, 2015.
2. Ito H, Hamada M, Uemiya A, Murayama Y, Katagiri M, & Tsujii M: Longitudinal Effect of Attention Deficit Hyperactivity Disorder Symptoms on Social Relationships. 5th World Congress on ADHD. Glasgow, UK. 2015.
3. Hamada M, Ito H, Murayama Y, Katagiri M, Uemiya A, Tsujii M: Relationships between ASD/ADHD symptoms and abnormal eating behaviors in children. International Meeting for Autism Research, 13-16 May, Salt Lake City, Utah, USA. 2015.

ポスター発表

1. Hamada M, Ito H, Murayama Y, Katagiri M, Uemiya A, Tsujii M: Relationships between neurodevelopmental symptoms and gender variance in children. 5th World Congress on ADHD, 28-31 May 2015, Glasgow, Scotland

(2) 国内学会の開催・参加

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 土屋賢治：疫学の精神医学への貢献について．第42回精神科診療所協会学術集会，2015年6月20～21日，浜松．【特別講演】

3) シンポジウム発表

1. 森則夫・土屋賢治：自閉症の病態研究と新たな診療技法（診断・予防・治療）の開発．日本医療研究開発機構 脳とこころの研究 第1回公開シンポジウム，2016年2月27日，東京．【シンポジウム発表】
2. 土屋賢治・高貝就：精神医学における予防の可能性：乳幼児の神経発達パターンとその決定因．第19回日本精神保健・予防学会学術集会，2015年12月1～2日，仙台．
3. 土屋賢治・浅野良輔・磯部智代・奥村明美・釘寄ゆめの・鈴木由紀子・中原竜治・中安智香子・原田妙子・西村倫子・山下真菜・伊東宏晃・高貝就・武井教使：シンポジウム：DOHaD 研究における出生コホート研究：浜松母と子の出生コホート研究から見た乳幼児の神経発達とその軌跡．第4回日本DOHaD研究会，2015年8月1～2日，東京．【シンポジウム発表】
4. 伊藤大幸・村山恭朗・片桐正敏・浜田恵・木谷秀勝・中澤潤：児童・青年の発達とメンタルヘルスに関する大規模縦断研究—書字・学習、情動調整方略、性別違和感との関連から—．日本発達心理学会第26回大会自主シンポジウム，2015．【シンポジウム発表】
5. 伊藤大幸・平島太郎・行廣隆次・大津起夫・谷伊織：心理学研究における構造方程式モデリング（SEM）の役割とピットフォール：SEM との「正しい付き合い方」とは．日本心理学会第79回大会自主シンポジウム，2015．【シンポジウム発表】

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

武井教使 : International Congress on Schizophrenia Research, ICSR: Academic Board Member

日本 DOHaD 研究会 評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国 内	外 国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0 件	8 件

(1) 国内の英文雑誌等の編集

(2) 外国の学術雑誌の編集

武井教使 : 1. *Acta Psychiatrica Scandinavica*[IF=5.605]誌の editorial board member

2. *British Journal of Psychiatry*[IF=7.991]誌の editorial board member

3. *Psychological Medicine*[IF=5.938]誌の editorial board member

4. *Schizophrenia Bulletin*[IF= 8.450]誌の editorial board member

5. *Journal of Neurodevelopmental Disorders*[IF=3.268]誌の editorial board member

6. *PLOS ONE*[IF=3.234]誌の statistical advisory board member

7. *PLOS ONE*[IF=3.234]誌の Academic Editor

土屋賢治 : 1. *PLOS ONE*[IF=3.234]誌の Academic Editor

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

土屋賢治 : *PLOS ONE*（米国）、3 回

Acta Psychiatrica Scandinavica（デンマーク）、1 回

Journal of Obstetrics and Gynaecology Research（日本）、1 回

9 共同研究の実施状況

	平成 27 年度
(1) 国際共同研究	2 件
(2) 国内共同研究	9 件
(3) 学内共同研究	3 件

(1) 国際共同研究

1. Birth Cohort Consortium in Asia（アジア出生コホートコンソーシアム）、韓国・中国・シンガポール・台湾・マレーシア・ネパールなど。シンガポール国立大 Chong-Yap Seng 教授、台湾国立大 Pochung Chen 教授
2. 精神科疾患をもつ患者の身体疾患の有病率調査、デンマーク、ドイツ、イタリアなど。
オールボー大学精神科 Povl Munk-Jorgensen 教授

(2) 国内共同研究

1. 発達障害の生物学的研究、理化学研究所 吉川武男シニアリーダー、共同研究。
2. 発達障害の遺伝学的研究、国立成育医療研究センター周産期病態研究部 秦健一郎先生、共同研究。
3. PET による発達障害のセロトニン仮説の証明、浜松ホトニクス、機器・施設利用による共同研究

4. 発達障害の血清学的研究、千葉大学 橋本謙二先生、共同研究.
5. 自閉症診断補助装置の開発、静岡大学工学部システム工学科 海老澤嘉伸教授および大阪大学大学院 片山泰一教授、共同研究.
6. 発達障害の早期発見をめざしたコホート研究（対象者収集とデータ解析）、国立健康科学大学院 横山徹爾部長、共同研究.
7. 発達障害の診断法、国立精神神経センター 児童思春期精神保健部 神尾陽子先生、共同研究
8. わが国における Developmental origins of Health and Disease (DOHaD) 研究の方向性の検討、国立健康・栄養研究所 栄養教育研究部 瀧本秀美部長および国立保健医療科学院 生活環境研究部 佐田文宏部長、共同研究.
9. 大規模コホート研究における追跡法の調査、国立保健科学医療院 生涯健康研究部、横山徹爾部長、情報および技術提供.

(3) 学内共同研究

1. 精神疾患の PET 研究、メディカルフォトンクス研究センター 生体機能イメージング研究室 尾内康臣教授.
2. 発達障害の早期発見のためのコホート研究、産婦人科学講座 金山尚裕・伊東宏晃教授、精神医学講座 森則夫教授.
3. 胎児期の糖代謝に関する研究、臨床検査学 前川真人教授、サンプル提供、共同論文執筆。

10 産学共同研究

	平成 27 年度
産学共同研究	1 件

1. (株) JVC ケンウッド、注視点検出装置 Gazefinder の開発。

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 脳画像研究：PET を中心とした発達障害の病態解明に貢献.
2. 社会心理学的研究：子どもの発達に沿った課題とその対策を発信.
3. 疫学研究：乳幼児の発達パターンの解明.

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. 被災地支援（福島県） 震災直後より継続的に行ってきた福島県浜通り地区の教育支援において、福島県教育委員会との連携を強め、また継続的支援とそのニーズを正確にとらえるための調査を継続的に行っている（福島県スクールカウンセラー等派遣事業、平成 26 年福島県子どもの心のサポートアドバイザーなど）。
2. 科学的根拠のある子育て支援を地域でサポートするための「ペアレント・プログラム」を開発し、普及した。（独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業「子育てにおける保護者支援と支援者研修」、厚生労働省障害者総合福祉推進事業「市町村で実施するペアレントトレーニングに関する調査について」、など）
3. Gazefinder（乳幼児の社会性の発達の評価装置）の開発を継続しつつ、社会実装に着手し、各地自治体

における1歳6ヶ月乳幼児健診での活用を進めた。(大阪大学、株・JVCKENWOODと共同開発)

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

子どものこころの発達研究センターは、近年取り沙汰されることの多い「子どものこころの危機」のありようを解明し、その科学的な対処法を発信する大学連合組織である。現在、国内7大学（大阪、金沢、福井、千葉、浜松医科に加え、26年度より鳥取、弘前が加入）との連合のもと、他に例のないミッションを掲げた大学連合は研究のみならず専門家の養成にも成果を上げ始めている。具体的には、インクルーシブ教育カリキュラムに対応可能な早期発達支援プログラムや、いじめ防止プログラムの作成を、5大学連合を中心に5大学連合で研究成果を上げた研究者たちが中心になって担当した。これらのプログラムは全国の教育現場への普及が間近である。また、5大学連合の研究・教育の成果に対する反響は大きく、平成26年度より鳥取大学、弘前大学にもあらたに「子どものこころの発達研究センター」が設立され、5大学と連合した。